



治療へのアプローチ

高橋楊子

弁証

弁証結果

弁証：脾気虚弱・湿阻気滞・清陽不昇・鬱而化熱

治則：健脾補中・化湿止瀉・理気除脹・昇陽除熱

処方：補中益気湯加減

黄耆 12g, 人参 6g, 茯苓 6g, 炙甘草 4g, 蒼朮 4g, 陳皮 4g, 厚朴 4g,
藿香 4g, 竜眼肉 4g, 大棗 4g, 砂仁 2g (後下), 柴胡 2g, 升麻 2g。

処方解説

補中益気湯は補中健脾・甘温除熱の代表的な方剤である。ここでは大量の黄耆に、人参・茯苓・炙甘草を加えて、健脾益気・止瀉助運・甘温除熱の効果をねらう。原方の白朮を蒼朮に変え、さらに陳皮・厚朴を配合して、燥湿理気・止瀉消脹の作用を増強させる。原方の当帰は養血の作用に優れるが、滑腸の心配もあるので、補脾養血安神の竜眼肉に変える。脾は芳香を好む特徴があるので、芳香の藿香・砂仁を入れて、その香りで胃液の分泌・胃腸の蠕動を促して食欲を増進させ、芳香化湿醒脾の目的を果たす。最後に少量の柴胡・升麻を入れて、昇提陽気の働きを増強する。

症例分析

本症例の主訴は発熱、下痢または軟便、体のだるさである。このなかで「発熱」について弁証論治を行う際、最も大切なことは外感発熱か内傷発熱かを区別することである。

この患者の熱は、毎回 37.6～37.9℃程度であまり高くなく、随伴症状には悪寒・頭痛などの外感症状はないので、本症例の発熱は外感発熱ではなく、内傷発熱であると断定できる。

内傷発熱の病因は、大きく2つに分けられる。ひとつは気・血・陰・陽の不足による発熱であり、これは虚証に属する。もうひとつは臓腑機能の失調がもたらした気滞・血瘀・食積・湿阻などの病理産物による発熱であり、これは実証に属する。実際の臨床現場では、さまざまな原因が絡み合っただけで虚実挟雑に属する発熱も少なくない。